

赤い小屋のこと

大坪秀二（16期）

98年の長野オリンピックでアルペンスキートの会場になった八方尾根に武蔵学園ヒュッテ（通称「赤い小屋」）があります。昨年の秋で竣工から満40年になりました。20周年の時には、山岳部OBが中心になって『赤い小屋―風雪の20年―』という50ページほどの記念誌を作りましたが、その時からまた20年余りが経過したわけです。建設に至るいきさつなどを書き残しておく意味でも、会報委員会からのお誘いに乗ることに致しました（なお、年代は主に西暦下2桁表記とします）。

旧制武蔵高校時代の昭和初年から、有志の山行・スキー行が始まっています。当時の山岳部は世間一般の学校山岳部の行き方と異なり、一般校友の山行・スキー行にサーブिसする活動にもかなり熱心でした。何人もの先生方がこうした活動に関係されましたが、歴史の原田亨一先生、ドイツ語の佐藤新一先生が一番深く関わられたし、よき指導者でもありました。その両先生の尽力で、山形県五色温泉の奥、家形山の北ふところに、地元の旅館と横浜ドック（株）、武蔵高校との合弁の山小屋「吾妻山荘」が出来たのは一九三四年でした。『武

蔵七十年史』にはその写真があります。私も42年年末をここの合宿に過ごしました。鋼板製の大きな薪ストーブを団欒の中心に据えたこのヒュッテでの生活は、日々に深まる戦争の泥沼への思いをいっとき忘れさせるような楽しいものでした。

戦後の苦しい日々の空白期のあと、50年の暮から旧制時代と同じ妙高高原燕温泉でのスキー合宿が再開されました。始めたのは、その年武蔵の教師になった私一人、教師としても学校としてでもなかったのですが、第2回目からは新制校友会の部として再発足した山岳部の合宿の形をとり、ドイツ語の森五郎先生をはじめ明石和彦さん（12期理）、目黒謙次郎君（18期理、当時武蔵高校教諭）、梶井伸一君（18期理、私の山仲間）など戦前のスキー合宿を知る何人もの方々の応援がありました。年を追って参加者も増え、山岳部の活動の一拠点ともなりました。その燕温泉の宿で主人の笹川さん父子（速雄・幸雄両氏。速雄さんは日本のスキーの草分け的な指導者だった）を囲む団欒には山小屋での生活のような雰囲気がありました。吾妻山荘の思い出や、それが戦後使えなくなってしまう残念さが語られ、今度こそ自分たちの力で自分たちの山小屋を持ちたいという希望が何時とはなく生まれ膨らんで、実現に向けての歩みが始まったわけです。

山小屋を建てる場所の決定までには多少の回り道もあったのですが、この話の初めから一貫して計画推進の中心となり、いつも力強い援助をして下さっていた明石さんと私との間で

は、あらゆる点から見て今の八方尾根が第一候補と心に決めていたのです。その頃の八方尾根には、もちろんリフトはなく、地元のスキークラブの黒菱小屋と、明治大学山岳部の黒菱山寮、住友氏所有の住友山荘とだけがあり、山スキーの聖地のようなところでした。山麓の八方は、当時は細野といって、旧制時代の山行でいつも世話になったガイドの大谷定雄さん、丸山武四さんの住んでおられた村でした。そのお二人の勧めもあって、私たちは、小屋を造るなら親身に世話をしてくれる人たちのいる八方尾根でと思い定めていたのです。燕との縁で親しくなった学習院OBの福岡孝行先生（法政大教授、日本スキー界の理論的指導者）が、戦中から戦後にかけて細野に疎開しておられ、私達の企てに何かと応援して下さいったことも一因でした。

52年の春には、明石さんが笹川幸雄さん、福岡さんたちと小屋の位置の物色に行かれました。その時の見当を無雪期に確かめるために、明石さんを交えて私たち数人は、翌年の夏山合宿の帰途を細野に立ち寄り、大谷さん・丸山さんの案内で身の丈を超す藪をこいで目当ての場所に辿りついて、白樺の木の間先高く鋭目を入れて目印にしました。翌年の雪の時に来て判別出来るためです。54年の3月には、森五郎先生、明石さんと当時高2の部員二人とが予定地の積雪状態を調べに行きました。ここまでは順調に運んだものの資金の見当が容易にはつかず、あれこれ思い悩みつつ月日を空費しました。しかしこの間に、スキー界の様子はどんどん変化していまし

た。福岡さんと明石さんが、オーストリア・スキーの第一人者ルディー・マツトを日本に呼ぶ企ての先導をされたりして、八方尾根と私たちとの距離がいつそう近くなりました。57年に佐藤先生を会長として武蔵OB山岳会が結成され、それと現役の大学、高校中学両山岳部三者の協力で山小屋建設事業を進めることで仮準備会が発足、58年秋には正式の設立準備委員会となり、募金の規模、方針、小屋の具体的なイメージ作りなどが相談されました。

小屋の設計については、発想の頃からの因縁で内野邦夫君（25期、当時鹿島建設）にお願いすることになりました。その上、燕での合宿の最初からのメンバー武藤清一君（24期）の父君、武藤清先生（当時東大工学部長、耐震構造の権威）から直々のアドバイスをいただき、武藤君の叔父上にあたる天沼彦一氏に後見役になっていただくことが出来ました（天沼氏は乗鞍にある東大ヒュッテの設計者でもあった）。

この58年には東急による八方尾根開発が急ピッチに進んで、山麓からゴンドラリフトが架かり、5年前に私たちが予定した場所はゴンドラの終点に近く、いずれはスキー場の中真ん中になってしまふことがわかりました。丸山さんたちの助言で急遽一段上の台地に変更。翌59年3月には借地契約。4月には募金がスタート。当時、学園では大学一学館建設の募金が進行中のため、こちらの募金範囲はあまり広げないようにと、山岳部OB、現役父兄を中心に燕でのスキー関係者などに限定し、ごく遠慮した活動でした。催促がましいことをほ

とんどしなかったにもかかわらず、分割拠出の約束も含めてですが、かなり早々と目標の一五〇万円を超えました。

募金が順調とはいえず、あり余る金額ではなかったため、建設用材のことも大問題でした。幾つかのつてを当たったあげく、奥武蔵の林業経営家で当時父兄の石井茂氏（後に学校山林顧問）に相談に伺いました。原価で分けていただければと考えてのことでしたが、話を聞いた石井さんは、用材全部を仕様通りに製材して無償で提供しようと言って下さいました。



申し訳なく思いつつもただただ有り難く、ご好意に甘えまして。大町の建設会社との工事契約額は一五〇万円、そのうち六〇万円ほどは木材・セメント・砂・砂利など約七〇トンの荷揚げ費用でした。

9月にかけて、富士川台風、伊勢湾台風と続き、大幅に荷揚げが遅れましたが、台風のと仕事ははかどりました。日曜ごとに、現場の様子を見て指示を与えるために、誰か彼かが交代で現地へ出張。土曜の夜行で出て早朝に細野に着き、

午後まで現場にいて夕刻は、大町に戻り、建設会社との連絡をすませて、松本を11時過ぎに出る夜行に乗る。こういうことが毎週でした。11月22日、現地で竣工式を行いました。学校からは鎌田教頭、畑・森岡主事、上野正源・依田修両施設委員、山岳部側から明石、大坪、井内（大学一期）の3人が出席、用材を寄付して下さった石井さんにも参加していただきました。よく晴れた小春日、まだランドウの小屋の中で持参の一升瓶の酒で落成を祝いました。涙の出るほどに嬉しい日でした。

小屋の外壁は内野君の発想で真っ赤に塗られ、窓枠と軒裏は白、屋根は銀色です。土地の人々が「ああ、あの赤い小屋ね」と言うことから、何時となく私達の間で「赤い小屋」が愛称となったのです。初めのシーズンはランプ生活でした。他の小屋との共同で電力の引き込みが行われ、翌冬からは

電灯がつけました。10万円ほどかったこの工事は、取って置きの寄付者として根津嘉一郎さんをお願いして、我々の小屋の建設がこれで一段落となりました。頂いた寄付金総額はほぼ二〇〇万円、これに資材その他の現物を加えると二五〇万円を超えました。これに、関係した人々の無償の労力奉仕を加えると金額は更に膨らむでしょうが、数字にすることは困難です。因みに、給与水準で見ると現在は当時の約十倍です。

小屋の完成から十年経たないうちに、私は教頭職に任ぜられ、殆ど同時に50周年記念事業としての新校舎建設と、そのための募金事業とが始まりました。その上、68年11月には新校舎建築現場で足場から転落、脊椎骨折の重傷を負って、以後5年間は山からもスキーからも全く遠ざかって暮らすことになりました。だから、小屋がスキーを愛する武蔵の人たちとくに山岳部の諸君の生活にとって不可欠なものになっていた70年代以後の諸活動は、全く百済・田中（勝）両先生のお力に負うものです。安定して水を得ることにこれほど苦労するとは、建設の当初は全く想像しませんでした。上の台地の水場に幾つもの小屋が建って、水溜れしてしまっただけです。百済先生を中心とする現役・OB諸君の苦闘は十年の余も続きました。六つの小屋が共同で水槽を作り、そこに黒菱小屋の水を分けてもらってリモコンのポンプで小屋まで汲み下ろす。こんな苦闘が実って、「とうとう小屋で風呂をわかつて入りましたよ」と報告してくれた百済さんの嬉しそうな顔を忘

れません。夏には有志を募って「自然観察会」。丸山さんの休耕田を借りて田植えから稲刈りまで3年間続いた農業体験会。収穫した餅米で特大の紅白の鏡餅をついて卒業式場にかつき込んだりしました。そうして、山岳部以外の武蔵と小屋とのつながりも、百済さん亡き今、半分悲しい思い出になりました。「武蔵学園後援会発行の『白雉たより』6号には、百済さんの「豊作会 三年坊主の記」という素晴らしい報告があります」

石井さんのおかげで総檜造りとなった小屋は、40年経っても風雪にびくともせず、健在です。その代わり、人間にとつては長い年月でした。建設に関わった人のうちで、森・佐藤両先生、大谷さん、丸山さん、明石さん、福岡さん、石井さんはじめ、多くの方が亡くなられました。一方、小屋に関わった沢山のOB諸君が、今では社会の各方面で重要な地位にいて立派な仕事をしておられます。40年の間に登山やスキーの事情は随分変わりましたが、武蔵の生徒諸君あたりの年代の人の生き方にも大きな変化があったようです。乏しい水を節約して使い、食事も一切を自分たちが作り、狭いスペースで寝起きする山岳部の生活を敢えて行おうという人はますます少数派になったようです。それでもこの40年の間に山岳部で活動する後継者が絶えずにいて、その人たちにとって「赤い小屋」が素敵な揺籃の役を果たしていることを、小屋の誕生に関わった人間の一人として嬉しく眺めている此の頃です。